

料などから付近に奥御殿があったとされており、日常生活に伴う廃棄遺構の存在からその台所が付近にあったと推定した。

木簡は現在整理中であるが、現段階で三九点が確認されている。付札状のもの他に、絵または記号らしき墨痕のある板材など多岐に及ぶ。一点は水路を伴い側板によって囲われた水溜状遺構から、それ以外は隅丸長方形や不定形の廃棄遺構群から肥前系陶磁(椀・皿・播鉢など)・土器(皿・風炉・焼塩壺など)・木製品(箸・柄杓など)などとともに出土している。

8 木簡の釈文・内容

水溜状遺構 S X 三四〇

(1) ・「。六郷伊賀守荷物庄司善九郎預」

・「。辰二月十五日」 301×63×15 011

廃棄遺構 S K 三二〇

(2) 「。御膳所御用」 156×39×6 011

廃棄遺構 S K 三一一

(3) ・「。飯田^{〔会カ〕}左衛門様

・「。飯田^{〔会カ〕}」 138×30×5 011

廃棄遺構 S K 三二五

(4) 「^{〔会カ〕}本庄城下
。六郷兵部殿
村岡権右衛門殿
江戸浅草屋敷
玉米理左衛門」 222×58×4 011

廃棄遺構 S K 三三五

(5) ・「今晚何之^{〔儀候カ〕}
^{〔分カ〕}今^{〔分カ〕}」 420×36×1 011

廃棄遺構 S K 三四一

(6) ・「一春慶^{〔角カ〕}
^{〔十人カ〕}切日光膳^{〔十人カ〕}
組三十枚之内」



(198)×42×9 019

廃棄遺構 S K 三六四

(7) ・「高橋此右衛門様
和泉屋
斎藤貞七様
作兵衛」
・「本^{〔会カ〕}拾丸与利^{〔会カ〕}印」 166×54×8 011

(8) ・「小」^{〔筮稚作雅カ〕} 卯^{〔八カ〕}月廿□□

・「」^{〔願カ〕} 趣□仁□□□□ (206)×18×4 065

(1)は水溜状遺構SX三四〇底面から出土した。庄司善九郎は、『本荘藩分限帳』で高二〇俵の藩士、親子二名が確認され、六郷伊賀守は藩主六郷政長、「辰二月」は延享五年（二七四八）と推定される。ただし、SX三四〇覆土には一七世紀代の磁器が含まれ、検出面からも一八世紀中葉までは下らないと見られるのでさらなる検討が必要である。

(2)は食器・調理具類などが最も多く出土した遺構から出土したもので、物品の所属を記した札と考えられる。検出層位・共伴遺物により一八世紀半ば頃と考えられる。

(3)には宛先もしくは所有者とみられる人名が表裏に記載されている。一八世紀半ば頃と考えられる。

(4)は江戸屋敷から国許に宛てたものである。人名は『本荘藩分限帳』でそれぞれ世襲された複数名が確認され、いずれも上級藩士であり、在府・国許間における要人同士のやりとりを示しているが、具体的内容の記載は無い。検出層位及び人名から一八世紀前半頃のものとして推定される。

(5)は長大ながらごく薄い材を用いている。表面の最後一文字及び裏面の最後二文字は書き手の略号であろうか。一八世紀半ば頃と考えられる。

(6)は上端の一部と下端が欠損し、裏面は腐朽が激しく、墨書の遺存状況はよくない。収納または貢進に關した札と考えられる。一八世紀半ば頃と考えられる。

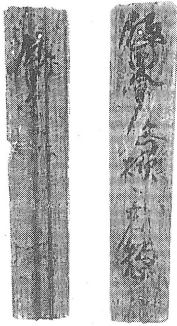
(7)は商人から藩士二名に宛てたもので、斎藤貞七は『本荘藩分限帳』で世襲された複数名が確認される。裏面に用件が記されていると推定される。検出層位により一八世紀前半以前と考えられる。

(8)は下端が欠損しているが、刀形を呈していて、本調査では唯一のものである。両面とも刃と鐙が表現され、さらに刃先には切り込みによる刃毀れ状の表現がある。表面には人名らしき記載がみられるが、裏面上部は塗りつぶされている。検出層位から一八世紀前半以前と推定される。

積読にあたっては、本荘市史編さん室の今野喜次氏のご教示を得た。

(長谷川潤一)

2001年出土の木簡



(3)



(2)



(1)



(5)



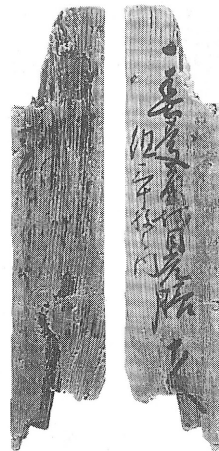
(4)



(8)



(7)



(6)